Osaka University Knowledge Archive

Title	地域社会における桜の花見の展開のあり方 : 鹿児島県伊佐市の近隣二集落における花見の展開プロセスに着目して
Author(s)	熊, 華磊
Citation	文化/批評. 2017, 8, p. 114-141
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75735
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

地域社会における桜の花見の展開のあり方
——鹿児島県伊佐市の近隣二集落における花見の展開プロセスに着目して——

熊　華磊

はじめに

現代日本社会において、桜の花見[1)]は一種の国民的慣習となっており、あるいは「日本文化」と称してもいいかもしれない。花見が「日本文化」だということは、本稿の大前提であるが、それに対して3点の説明を付け加えなければならない。

まず、花見とは何か、である。従来の研究では、花見に対する定義がほとんど見当たらない。それはおそらく、日本人にとって花見は自明的なものだからである。国語辞典にみる解釈は、花見に対するもっともシンプルでもっとも共有されている認識であろう。「花、特に桜の花を眺めて楽しむこと」[『大辞泉』 1995: 2154]。ここでは、「桜」が特に強調されている。しかし、「桜」の強調により、花見に含まれている他の要素が隠蔽されてしまう危険性がある。そこで、白幡洋三郎は「群桜」、「飲食」、「群集」という花見の3要素を提示した[白幡 2000: 14]。「桜」はあくまでも花見の中の1つの要素にすぎないという白幡の指摘に頷ける。しかし、白幡は外国には花見がない[白幡 2000: 18]という文脈の中で、3要素のいずれかが欠ければ、花見でなくなるという強い規定を設定した。現に、白幡は大阪の花見名物である造幣局の通り抜けについて、「造幣局の通り抜けは、私の定義から厳密に言うと『花見』に入らない。『群桜』『群集』は申し分ないが、『飲食』に問題がある。（中略）造幣局の通り抜けは、花見の場と言うよりは盛り場と言った方がよい」[白幡 2000: 203-204]と言及した。ところが、造幣局の通り抜けの花見客に聞けば、誰もが自分は「花見」をしていると考えているであろう。

そこで、筆者は、花見に対する何らかの定義を規定し、その枠組みの中で花見と判断される事象を探って調査するのではなく、むしろ、日本社会において現地の人々に「花見」と認識され、実践される事象を「花見」と判断し、それがどのような花見なのかについて研究を進めるスタンスを取りたい。また、本稿であえ

て「桜の花見」を対象とした理由は、本稿の主たる目的が近代以降に「日本文化」が構築される一局面の解明だからである。本稿における鹿児島県伊佐市の近隣二集落の花見[2)]は、まさにこのような視点のもとで捉えた事例である。

次に、「日本文化」とは何かである。これに関して多くの言論が存在しているが、定説といえるものはない。何せ、「文化」に関してさえもすべての人が頷けるような定義はないからである。本稿は、「日本文化」とは何かについての検討を目的としていない。ここでは、花見は「日本文化」だという本稿の前提にいう「日本文化」とは何なのかについて、筆者の考えを説明したい。

「日本文化」すなわち「日本の文化」。この中に「日本の」と「文化」という2つの要素が含まれている。まず、「日本の」という場合、「対外性」と「対自性」という2つの側面が考えられる。簡単に言うと、外国人にも、日本人にも、それが「日本の」として認識される必要がある。この点について、「花見」はクリアできるだろう[3)]。一方、「文化」について、人類学における最初のもっとも基本的な文化の定義とされるタイラーの定義を採用したい。すなわち、「文化あるいは文明とは、その広い民族誌的な意味において、知識、信仰、芸術、法律、慣習、その他、およそ人間が社会の成員として獲得した能力や習性を含む複合的全体である」[E.B.タイラー 1962]。ここでも、慣習としての花見は文化であるに違いない。

これによって、花見は「日本文化」だという本稿の前提が成り立つわけであるが、最後に、筆者にとって、この前提は決して本質的なものではなく、むしろ、現代日本社会に現実に存在する現象として考えている。このような考えから生まれた本稿の問題意識は、なぜ花見は「日本文化」なのかではなく、どうやって花見が「日本文化」になれたのかである。

従来、花見についての研究は比較的少なく、桜についての研究の中に花見に関する知見が内包されているという形が多くみられる。これはまさに、従来の研究者の多くが、なぜ花見は「日本文化」なのかについて説明しようとする時に真っ先に思いついたのが桜だという思考パターンの表れである。その中でも、古代から近現代までの間、歴史上に存在する日本人と桜との関連事象を連続的にレビューする研究が多い[4)]。そして、このような研究から、著者の意識の有無にかかわらず、歴史的連続性から生み出された日本人と桜との本質的関係が生産される傾向がある。佐藤太平は「國民性と櫻」の節で、「春毎に咲いては散れ、散れては咲いてゐる櫻に、いかでか國民の無關心たることを得よう、同じ國土の精を受けてゐ

る櫻と國民との相通じてゐる、決して偶然でない」[佐藤 1937: 146]というように、桜と国民が、歴史的に「國土」を共有してきたことについての主張がその代表的な例である。

また、民俗学においても別種の本質的言説が生み出されている。折口信夫が「花と言ふ語は、簡単に言ふと、ほ・うらと意の近いもので、前兆・先觸れと言ふ位の意味になるらしい」[折口 1955: 471]と、古代日本における花の持つ信仰的意味を主張したのがその始まりである。桜井満により、桜の語源が「サ」＝「サ神」、「クラ」＝「神の依代」というふうに解釈され[桜井 1961]、このような桜の下で神に奉納する信仰的行事が古代日本に存在し、それがやがて神との共食となり、さらに、人間の共食的行事、すなわち花見の起源となると和歌森太郎が指摘した[和歌森 1981]。つまり、日本人と桜との本質的関係が古代日本における農耕信仰に基づく儀礼から由来するという言説である。

一方、こうした日本人と桜との本質的関係から花見を説明しようとする言説に対する批判的研究もある。白幡は従来よく見られる桜論の危険性について、「桜は容易に擬人化され、その咲き方・散り方と人の生き方が安易に重ねあわせて論じられてきた」[白幡 2000: 43] と指摘し、桜の研究者である齋藤正二は桜論の多くに対し、桜を科学的に見るものではなく、桜を通して日本・日本人を語る一種の「神話」であると強く批判した[齋藤 2002]。また、小松和彦は「桜の花に託された意味は、個々の時代状況のなかで、さまざまな社会の諸関係のなかで、そしてそのなかに生きる人びとによって作り出され継承されたり衰退・消滅するものであり、その意味（機能）はそのなかで検証・抽出されるべきだ」[小松 2002: 248]と、日本人と桜との関係性を歴史的・空間的に、連続したものとして捉える研究手法に対し批判した。

ただ、なぜ花見は「日本文化」なのかに対するとき、日本人と桜との本質的関係性から説明しようとする研究は批判されるべきであるとも考えるが、これをいくら批判したところで、こうした本質論を含めた多くの言説と実践の積み重ねで、現代日本社会において花見が「日本文化」となってきたという現実に変わりはない。ここで必要なのはまさに前述したように、どうやって花見が「日本文化」になれたのかという視点に基づく実証的な研究である。こうした試みは従来の研究においてほとんど皆無であるため、ここに本稿を位置づけしたい。

花見の「日本文化化」現象は様々な場面で起こっていると考えられる。その中

の1つの場面として地域社会がある。現代日本社会における花見という慣習の全国的普及が明治以降のことであると多くの研究者に肯定されてきた。佐藤太平は、「明治以後は櫻の勝地は全國的に起つてゐて、公園とか神社寺院等の空地廣場には花影の絶つ處がない程に櫻が植ゑられてゐる」[佐藤 1937: 169]と述べ、今野圓輔も、「花見といったところで、明治以後の花見が昔ながらでは、けっしてなかった。(中略) 花見の名所が急に増加して、花見が一般の流行になったのは明治・大正期に入ってからだった」[今野 1976: 75-76]と述べたように、全国的な桜の植樹ブームや、花見の一般化は明治以降のことであると考えられる。また、佐野藤右衛門は、「古いソメイヨシノの木で残っているのは、日露戦争の戦勝記念というのが一番多いんですな。明治三十九 (1906) 年ごろですか。そのあとも、いわゆる国民的行事、国家的行事のあるときに植えているんです」[佐野 1998: 95] と述べ、勝木俊雄が、「'染井吉野' は江戸時代の終わりに『吉野桜』として江戸の染井村から広まった栽培品種で、明治時代になると爆発的に全国に広がり、(中略) '染井吉野' が広がることで、現代の我々がおこなっているお花見の様式も定着したといえるだろうか」[勝木 2015: 6-7] と述べたように、日本全国における花見の普及に大いに関わっている「ソメイヨシノ」という品種の普及もまさに明治以降のことである。

したがって、従来花見がなかった地域社会において花見がいかに受容され、展開されてきたのかという疑問が生まれてくる。この疑問に対し、本稿では、鹿児島県伊佐市にある平出水中央集落と向江集落という近隣する二集落を調査地とし、この二集落における花見の展開プロセスに着目する。なぜ鹿児島県伊佐市にある二集落を調査地として選定したのかについて、3点に分けて説明したい。

まず、鹿児島県伊佐市にした理由は、この地方では明治以前に現在のような桜の花見がなかったと考えられる[5]からだ。現在の伊佐市では花見の名所として、主に忠元公園と曾木の滝の2箇所がある。江戸末期に書かれた『三国名勝図会』には曾木の滝における春先の野遊びに関する記述があるが、記述の中には特に「桜」や「花見」の言葉が出ていない[『三国名勝図会　中巻』 1966: 324]。一方、もう1つの名所である忠元公園で桜が植樹されたのが1908 (明治41) 年であり[熊 2013: 200]、これが伊佐地方における桜の花見のはじまりであると考えられる。

次に、現在鹿児島県伊佐市では主に2つの形態の花見が行われている。1つは忠元公園を代表とする「名所・公園の花見」であり、もう1つは集落単位で行われる

「集落の花見」である。「集落の花見」は「名所・公園の花見」に比べ、花見をする人の流動性が少なく、より捉えやすいため、花見の展開プロセスがより立体的かつ詳細に記述できると考え、調査対象を「集落の花見」とした。

最後に、1つの集落を単独的に捉えるのではなく、あえて近隣する二集落を調査地として設定した目的は、自然的・社会的環境が極めて近い地域社会において花見の展開プロセスに差異が存在するかどうかを検証するためであり、その要因を探るためである。

上記した内容をまとめると、本稿は、現代日本社会において、花見がいかにして「日本文化」になれたのかについて、その1つの場面である地域社会に着目し、地域社会における花見の展開のあり方を明らかにし、さらに、その中から、花見の「日本文化化」現象に必要などのような要素が再生産されているのかについて議論する。

1．調査地概要

本稿の調査地の平出水中央集落と向江集落は、鹿児島県伊佐市平出水に属している近隣集落である。

伊佐市平出水は平泉とも書き、室町期（1392-1573）から見える地名である。江戸期～1898（明治22）年は平出水村となり、その後は大字平出水となる。当地は肥沃な田地と清流の平出水川、伊佐富士と誇る鳥神岡など自然に恵まれた農業の盛んな所であり、また地域住民の絆の強い活気ある地域である[6]。平出水はさらに渕辺、中央、向江、平原、上、日東の6つの集

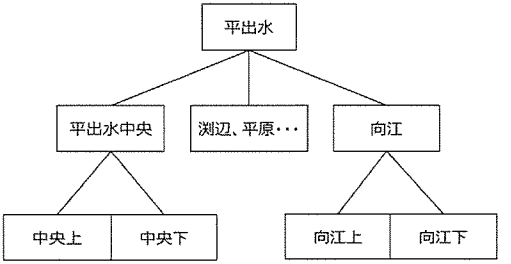

図１：調査地における各集落、小組合の関係

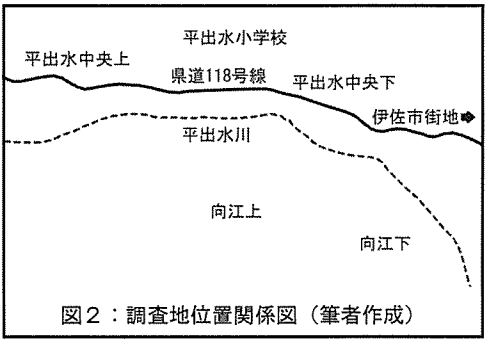

図２：調査地位置関係図（筆者作成）

落に分かれている。

1－1．平出水中央集落

平出水中央集落は平出水川の北側に位置し、川の流れに沿って川上から川下にかけて平出水中央上、平出水中央中と平出水中央下[7]という3つの小組合に分かれていたが、2005年中央上と中央中が合併し、現在は、中央上と中央下という2つの小組合によって構成されている（図1）。

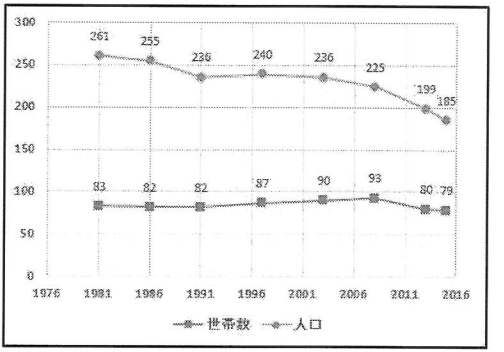

表１：平出水中央集落の人口推移表
（「統計おおくち」「統計いさ」参照）

平出水中央の現在の世帯数は79世帯であり、人口は185名である[8]。平出水中央集落の1981年～2015年の人口推移を表1で確認できるが、人口が減少傾向にある。2016年の高齢者数は51名で、総人口の3割近くを占めている。また、平出水中央には平出水地区の児童たちが通う平出水小学校があるが、その児童数も1981年には47名[9]だったものが、2016年9月現在では9名に減ってしまった。そのうち、平出水中央の児童数は3名である。つまり、現状では、平出水中央には高齢者は少なくないものの青壮年もある程度いて、そのため、地域的には元気を保っているが、少子化の進行による小学校の廃校や集落の衰退など、将来に対する不安も大いにある。

平出水中央の生業に関しては、自治会長に確認したところ、高度経済成長期以前はほとんどが専業農家であり、農作物のほとんどが米であった。その後、機械化及び都市化の進行に従い、専業農家数が著しく減少し、兼業農家及び脱農者が増えてきた。

時期	行事内容	主催地域
4月	花見	中央上、中央下
5月	カンナレ講（雷講）	中央上
7月	六月灯	中央下
9月	彼岸講	中央下
11月	田の神講	中央上
1月	鬼火焚き	中央上、中央下
3月	彼岸講	中央下

表２：平出水中央の年中行事一覧表

平出水中央から伊佐市の市街地まで車で10分ほどと、比較的距離が近いため、平出水中央に住み、市街地で仕事をする者も少なくない。

平出水中央の現在の年中行事に関しては、表2のようになる。表で示したのはいわゆる民俗行事であるが、他に、平出水小学校の運動会や夏祭り、コンサートなど、校区の行事もたくさんあり、年中行事が比較的多い地域だとも言える。

１－２．向江集落

向江集落は平出水中央と平出水川を隔てて、川の南側に位置する。川の流れに沿って、向江上と向江下という2つの小組合に分かれている。向江集落の中心には止上神社があり、かつては平出水全体の中心的神社だったという。また、止上神社の境内には小さな湧水の池があり、「平出水」という地名はここから出たといういわれもある。

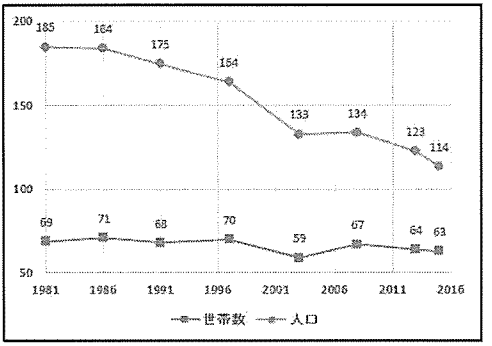

表３：向江集落の人口推移表
（「統計おおくち」「統計いさ」参照）

向江の現在の世帯数は63世帯であり、人口は114名である[10]。また、向江集落の1981年～2015年の人口推移を表3で確認できるが、平出水中央より人口の減少が著しい。2016年の高齢者数は41名で、平出水小学校に通う児童数は3名である。

向江の生業に関しては、平出水中央と同じように、農家の兼業化や脱農化が顕著である。しかし、平出水中央では田んぼ以外に畑もあるため、野菜作りの専業農家がいるのに対し、向江の農地はほとんど田んぼであるため、米作以外で農業を専業とすることが難しい。

向江の住民によると、向江はかつて六月灯をはじめ、多くの年中行事を有する賑やかな集落だったが、過疎化、高齢化の進行に伴い、現在、集落の行事は1つも残っていない。集落全住民の集まりは校区行事の後に行う程度である。

本稿では、前章で紹介した二集落における花見の展開について、①受容②在地行事との逆転③内面化という3つの段階に分けてそれぞれを記述し、照らし合わせて考察を行いたい。なお、この3つの段階は、年代を基準に設定したものではなく、花見の展開の特徴に準じて分けたものである。そのため、同じ段階の二集落の事例が必ずしも同じ年代のものとは限らない。また、図1で示したように、平出水中

央と向江はさらに上・下のような小組合に分かれている。本稿では、各小組合の事例を網羅的に記述するのではなく、1つの小組合の事例を、その段階における当該集落の代表事例として取り上げる場合がある。さらに、二集落の事例を対照することを通して、その違いを見いだすことを目的とするのではなく、むしろ、同じような要素を見いだし、その要因について考えていきたい。

2．花見の受容

2－1．中央上

本稿では、現代日本社会における花見という慣習の全国的普及が明治以降のことであり、したがって、鹿児島県伊佐地方の集落部においても同様であるという前提に立ち、本稿で取り上げる二集落における花見の受容について記述、考察するが、鹿児島地方における花見の受容に関する詳しい検証については別稿に譲り、ここでは割愛する。

中央上の花見はいつから始まったのか定かではないが、向江在住の郷土史研究家である宝泉市二氏（94）によると、中央上の最初の花見は「フレオカ」という場所で行われた。これは宝泉氏がかつて[11]集落の古老に確認したもので、戦前の話であることは間違いない。宝泉氏によると、「フレオカ」の漢字表記として「布令丘」が考えられる。平たい田んぼの真ん中で隆起した場所なので、昔そこで布令が行われたのではないかと推測している。また、「フレオカ」は昔、牛馬の墓場でもあったと言われる。この「フレオカ」における花見に関する記述があるが、以下で引用する。

> 春の花見頃になると、ニエノキ[12]のフレガオカに、下ンチョ[13]はセノカン（塞の神）の前の砂とり場の峠に、三尺角の芝小口をした土塚を築いて、塚の中に銭三厘を埋める。昼前にこれを終わり、昼から馬牛の仔が産まれた家から一匹につき五銭位ずつ集めて花見をした。太鼓、三味線で集まり、歌やおどりで賑わって楽しいものであった。今ばやりのレクレーションを兼ねた豊年祈願の行事であったと思う[宝泉 2009: 23-24]。

この記述から、「フレオカ」での花見と牛馬供養の行事との関係性がみられる。具体的にいうと、牛馬供養が主の行事であり、供養のための儀礼が終わり、その

緊張状態から解放するための宴会の部分が、花見にあたる。

2－2．向江上

向江上では、宝泉氏の記憶によれば、少なくとも1912（大正元）年から花見があった。当時は「ンマネセバ」[14)]で花見を行った。「ンマネセバ」については、下野敏見が以下のように記述している。「大口の麓では、明治末年頃、農耕馬が各戸に2、3頭いた。牛は少なかった。春秋には、『馬寝せ』と言って、諏訪神社の登り口の広場で、青年4、5人が馬を倒して押さえて、足の血を取った。（中略）そのあと、慰労会をした」[下野 2011: 285]。下野の記述は向江の話ではないが、宝泉氏も、「ンマネセバ」で馬を寝かせて血を抜き、治療を施したと話しているので、「ンマネセバ」という場所の性格がある程度推察できる。また、「ンマネセバ」には桜がなく、その代わり、大きな松の木があったので、その下で花見が行われたという。

一方、『大口市郷土誌　上巻』では、年中行事の「クヨツッ（供養築き）」の項目の中に、向江の「クヨ」という塚の所でクヨツッの行事が行われ、クヨツッが済んだ後の適日に花見をしたという記述があった［『大口市郷土誌上巻』 1978: 676］。「クヨツッ」は、4月10日に、集落内で塚を築き、その上に「供養松」を挿して供養を行うのが一般的である。供養を通して、これからの農繁期に、農耕に欠かせない牛馬が病気にならないことを祈願する。したがって、向江の「クヨ」という場所は、向江上にある「ンマネセバ」なのか、それとも向江下にある場所だったのか定かではないが、「ンマネセバ」での花見も牛馬供養の行事と関係していることは確かである。

2－3．在地行事の宴会部分として受容された花見

上述した中央上の「フレオカ」での花見と向江上の「ンマネセバ」での花見の事例を比較してみると、二集落での花見の受容において同じような特徴が見いだせる。すなわち、当時の春先に行われた牛馬の供養に関連する在地行事の宴会部分として、花見が受容されたことである。また、花見という名称が受容されたとはいえ、二集落ともに当時、桜に関連する記述や記憶はなかった。つまり、「フレオカ」の花見や「ンマネセバ」の花見に関する記述の中の「花見」を「宴会」、あ

るいは、下野の言葉を借りて、「慰労会」と書き換えることも可能であろう。

前述したように、伊佐地方で初めて、現在にいう花見が行われたのが、1908（明治41）年の桜植樹により形成された「忠元公園」においてであると考える。ここで1つの仮説を立てたい。中央上や向江上のような集落部は、日清日露戦争以降における桜、とりわけソメイヨシノの全国的植樹やそれに伴う花見の普及というコンテキストに置かれ、さらに、花見の実例として近くの都市部にある「忠元公園」での花見に影響を受けて、花見を受容したと考える。そして、興味深いのが、花見が行事そのものとして受容されたのではなく、呼称として、あるいは一種の記号として、集落の春先の在地行事の宴会部分に当てられた形で受容された点である。

白幡が提示した花見の3要素を借りると、筆者の考えでは、この3要素[15]が、花見を規定するものではなく、むしろ、花見に内包される多様な意味を表すものであり、そして、それは操作可能なものでもある。中央上や向江上においてはまさに、「桜」の要素を除き、「飲食」・「群集」＝「娯楽としての共食」という意味が含まれた記号として、花見を受容したのである。そして、なぜ「宴会」、「慰労会」ではなく、「花見」なのかというと、当時の社会的コンテキストの中で、「花見」が春先の「娯楽としての共食」として、より典型的、一般的だからである。インフォーマントの言葉を借りると、「花見は飲む口実だから」である。

こうして、当時の日本社会という大きなコンテキストの中において花見が持つ一般性が、集落という、より小さいコンテキストの中で認識され、消費され、そして、集落の中に組み込まれながら再生産されるとして、二集落における花見の受容を解釈できる。

3．花見と在地行事との逆転

前節では中央上と向江上の花見について取り上げたが、中央下も、向江下も、戦前から花見が受容され、行われるようになった。二集落において、在地行事である牛馬供養の行事の宴会部分として花見が受容されたが、時代の変遷に伴い、在地行事の一部として組み込まれた花見という構図にも変化が生じた。

3－1．在地行事の消滅

まずは、在地行事の衰退、消滅である。二集落ともに牛馬供養の行事を持っていたが、そこには当時の伊佐地方の農作業では牛や馬が欠かせない存在だったという背景がある。伊佐地方では、農作業が始まる前の春先に、「クヨツッ」以外にも、「馬頭観音祭り」や「バトウカンコ」といった牛馬の無病息災を祈願する行事が多く見られる。宝泉氏をはじめ、伊佐地方に住む80代以上の多くのインフォーマントから、彼らが小さい頃、各家に馬が飼育され、農作業で活躍したという話を聞いた。また、大口市郷土誌の資料集『ふるさと散歩（資料第7集』によれば、「大口地方では、藩制のころ農耕の便をはかるため、藩の金三百両を借り受けて馬を購入、農家に分配して飼育させ、（中略）こうした事から農家にとっては農耕に必要な動力源というよりも、むしろ財産としての牛馬であった」[大口郷土誌編さん委員会 1979: 10]。このことからも、牛馬に関連する在地行事の存在基盤がうかがえる。

ところが、近代化の中で、農業においても機械化が進むにつれ、牛馬の出番が減少し、やがて農作業の動力源として牛馬を飼育する農家もほとんどなくなった。したがって、牛馬の無病息災を祈願するための行事も存在意義を失っていった。その中で、平出水中央と向江における「クヨツッ」の行事が完全に消滅してしまった[16]が、そのかわり、従来「クヨツッ」の中で、儀礼における緊張からの解放を目的とした宴会の部分として受容されていた花見が、1つの独立した行事として盛んに行われるようになってきた。本稿では、この現象を「花見と在地行事との逆転」[17]と呼ぶ。以下では、この時期の花見の様子、特に桜の導入について、中央上と向江下の事例を紹介する。

3－2．桜の植樹

中央上では、「クヨツッ」の行事を止めてからも、「フレオカ」で花見が行われ続けた。その上、「フレオカ」では桜も植えられた。中央上在住のHH氏（83）によると、「フレオカの上で花見した。もうとっても寒かった。その意味じゃ忘りゃならん。後から風よけのために、桜の木でビニールを1周張って、その中で踊りをして、飲んだりした」。そこから、桜の木を伝って張ったビニールの中が広く、集落全員が花見できるほど桜の木が多かった様子が想像できる。また、KS氏（79）

は「フレオカの桜はずっと植え替え続けて、もう3代目にもなった。その後病虫害でやられて、現在苗木が植えられている。昔はその木を各家庭で管理したのじゃないか」と、「フレオカ」における桜の植樹や管理について話した。

一方、向江下では、花見が最初に受容された頃の様子について、調査で明らかにすることができなかった。ただ、『大口郷土誌　上巻』に記載されている向江の「クヨ」という場所が向江上の「ンマネセバ」でない場合、「クヨ」は向江下のどこかを指していると考えられる。とすれば、向江下の花見も最初は牛馬供養の行事の中に受容されたと推測できる。ところが、ここに向江下の花見に関する確かな話がある。向江出身のKY氏（99）によれば、向江下では戦前まで、止上神社の近くの丘の上を整備して「公園」と呼び、その「公園」で花見が行われていた。当時、丘の上まで続く道に沿って、桜の木が50本以上も植えられて、花が咲くととてもきれいだったという。戦前という時代背景を考えると、小さな集落でたくさんの桜を植樹できたということは少し不思議であるが、酒屋[18]や、当時の平出水小学校の先生など、集落に何人かの有力者が引っ張り役として存在していたことが、その大きな要因であったろうと、KY氏がいう。

３－３．結衆における娯楽的装置として在地行事を代替する花見

上記した内容からわかるように、農作業における技術の革新に伴い、牛馬を飼育する農家がほとんどなくなり、牛馬の無病息災を祈願する在地行事が意味を失い、消滅した。しかし、この段階[19]では二集落住民の多くがまだ専業農家であり、農作業における多くの場面ではまだ協同作業が必要とされていた。

KS氏によれば、中央上においては、高度経済成長期以前の農作業の中で、協同で行わなければならない部分はだいたい以下の6つの段階に分けることができる。①井堰作り②溝浚え③苗準備④田植え⑤稲刈り⑥米すり。そのうち特に重要なのは田植えである。機械が普及し始めたとはいえ、まだ多くの人力を要する当時の田植えは、効率をよくするために、水の引き込みが早い順から協同で作業が行われた。また、主人や働き手が病気や怪我などで働けない家のところを、集落を挙げて加勢をする慣行も行われた。

このような多くの協同農作業を成り立たせるためには、2つの条件が必要だと考えられる。1つは集落住民間の親睦であり、もう1つは実際の作業時の計画作りや意思疎通である。そのために、協同農作業、特に田植えの前に集落の結衆が必要

とされる。これこそが、牛馬に関連する在地行事の消滅後も花見が継続された要因である。上記で取り上げた中央上と向江下以外にも、中央下では当時レンゲ草の花見が行われていた。中央下出身のS氏（83）によれば、「レンゲ草の花見はサナブイ[20]の対概念で、田植え前の親睦を図ることが一番の目的だ」という。

ところで、前節で述べたように、在地行事の宴会部分として受容された当初の花見は、1つの独立した行事ではなく、「娯楽としての共食」という意味を持つ記号にすぎない。そのまま継続すると、ただの「ノンカタ」[21]と変わりはなく、結衆のための向心力に欠けると判断され、中央上と向江下では、当時の日本社会における一般的な花見の要素である桜が導入された。中央下では、おそらく経済的な理由で桜こそ植樹されなかったが、その代わりとして既存のレンゲ草が活用されたわけである。

この段階で、集落においては、結衆を容易にする働きを持ち、日本社会における一般的であった花見が、この二集落において在地行事に代わって再生産されるようになったといえる。そして、それは「中央」から押し付けられた、あるいは「中央の文化」の影響を強く受けた結果ではなく、集落における生業技術の変遷に伴う、集落住民の能動的な実践の結果であると解釈できる。

4．花見の内面化

前述してきたように、二集落において花見が在地行事の宴会部分として受容され、その後は、在地行事に代わって独立した行事として継続されてきた。ところがこの段階に至って、集落とは異なる次元で、つまり日本全国において、花見の名所がどんどん造成されるようになってきた。その状況の中で、集落住民は集落内だけでなく、近くにある桜の名所でも花見を享受するようになったと考えられる。伊佐地方では、高度経済成長期前までに、少なくとも「忠元公園」と「曾木の滝」という2つの桜の名所が存在した。宝泉氏の記憶によれば、「小さい頃は親に連れられ、1時間以上も歩いて忠元公園に花見しに行った。ある年、大雨で平出水と大口市街地との間の橋が流され、結局忠元公園に行けなくなったことがあり、大変残念だった」という。このように、集落の住民にとって、集落での花見と、○○公園や名所での花見という2種類の花見が存在するようになった。その中で、公園や名所での花見を「外」での花見として捉えれば、集落での花見は「内」の

花見となる。

本稿では、「内」なる「集落の花見」にまつわる集落住民の諸実践を、集落における「花見の内面化」として捉える。もちろん、「花見の受容」や「花見と在地行事との逆転」という2つの段階も「花見の内面化」の一段階として捉えられるが、「外」の花見と区別し、「集落の」を十分に意識した諸実践としての「花見の内面化」が一番顕著に見られるのが、高度経済成長期以降である。したがって、本節では高度経済成長期以降から現在までの事例を取り上げることにする。では、二集落おいて、「花見の内面化」がなぜ、どのような様相で行われてきたのか、そして、二集落の間にどんな差異が存在するのかについて以下で述べたい。

４－１．平出水中央の花見における変化

前述したように、中央上では、「フレオカ」に植えられた桜の下で花見が行われてきた。一方、中央下では「レンゲ草」の花見が行われ、およそ40年前に中央下領域内にある愛宕神社付近に桜が植えられ、そこで桜の花見が行われるようになった。つまり、中央上・下ともに一時、屋外の桜の下での花見が存在していた。ところが、現在の両方の花見の様子はどうであろうか。

図３：平出水中央上の現在の花見の様子

（2013年4月筆者撮影）

図３は、中央上の現在の花見の様子である。現在、中央上の花見は2005年にできた集会所の「いなほ館」で行われるようになった。花見は毎年4月の第1日曜日に行われ、昼からスタートする。「いなほ館」の部屋の中でテーブルが2列に並べて置かれ、男性と女性や子供が分かれて座る。1人ずつ弁当が用意される。写真ではわかりづらいが、テレビの横に八重桜[22]の枝が挿された花瓶が1本置かれていて、花見であることを示している。

なぜ、中央上の花見が桜の下から「いなほ館」という室内で行われるようになったのだろうか。KR氏（50）によると、3つの理由が挙げられる。

①4月の伊佐はまだまだ寒く、小高い丘になっている「フレオカ」は風の当たりも強い。また、天候の心配もしなければならない。②「フレオカ」には桜があったが、宴会に必要な「火」と「水」がないため花見を段取る係の人が準備に苦労する。③いなほ館ができる前に、何年間か花見の日に雨が続いた。当時の中央上公民館は「フレオカ」からかなり離れていて、雨が降ってから公民館に移動するとなると大変なので、そのまま公民館で開催するようになった。桜はないが集まって宴会をするには室内がいいという意見が出始めた。ここから室内での花見が始まり、2005年に「いなほ館」に移され、現在に至る。

図４：平出水中央下の現在の花見の様子

（2013年4月筆者撮影 ）

一方、中央下にも花見の室内化が生じた。図4は中央下の現在の花見の様子である。中央下の花見は中央上と同じ、毎年4月の第1日曜日に行われる。現在では、中央下の集会所である「消防団詰所」の中で、テーブルが建物の構造に沿って「L」字型に置かれ、男性が「L」の縦線に集まり、女性と子供は横線の部分にすわる。テーブルの上にはオードブルやおにぎり、ビールやお茶などの飲み物が置かれ、みんなが取り合って飲食する。そして、集落住民の庭に植えてあった満開の八重桜の枝を折ってペットボトルに挿し、テーブルの上に3、4本置いて、花見であることを示している。

「消防団の詰所」は中央上の「いなほ館」に比べると比較的狭いが、集会を開けるほどの広さの部屋はある。「水」や「火」など、宴会を行うための設備も備わっている。中央下が、花見の場所を「レンゲ草畑」から「愛宕神社付近」、そして「消防団の詰所」へと、室外から室内へ移した理由について、S氏は「係の人は雨が降ると、会場の整理など難儀をするというので、今は部屋の中でやるようになった」と、中央上と同じような理由を挙げて説明した。また、「『愛宕神社』は公

民館から離れた場所にあり、参道が足場の悪い坂道である。そのため準備の大変さはもちろん、高齢者が歩いて行くことが困難なために参加者が減ってしまった経緯があった」という理由も挙げられた。

以上のように、中央上・下における花見の一番顕著な変化は、花見の「室内化」として捉えられる。そして、もう１つ変化が見られるが、それは弁当の変化である。上述したとおり、中央上では現在、人数分の弁当が用意される。中央下ではオードブルやおにぎりなど、盛り合わせの形を取っている。共通しているのは、両方とも花見参加者から集金し、市街地にある店でまとめて買うようになったことである。ところが、かつての花見といえば、各家から手弁当を持って行くのがほとんどだった。

当時の花見弁当・料理について女性のインフォーマントに聞くと、「煮しめ」、「きんぴらごぼう」、「卵焼き」、「タビラコを取って、にんにくと炒めて、卵とじをしてな」、「タニシを湯掻いて、卵とニラでとじて、それは一番美味しいもんだな」、「昔は卵がないから、かぼちゃを卵焼きふうに作った。それはうまいもんだ」などと、料理の名称や作り方に関する語りが数多く出てきた。そして、その中で、「誰々のお母さんの何々料理が」という表現も多かった。花見弁当は当時の普段の料理と違っているのかと尋ねたところ、「毎日はそうしないだろう。煮しめとか、卵焼きとか、やはり花見の時にちゃんと弁当を作って」と婦人達が声をそろえて言う。花見の場で各家の手弁当の交換があるのかについて聞くと、「それはあった。もらったり、やったりして、それで料理の話にも花が咲いた。料理自慢の女性は自らたくさん料理を作ってきて振る舞った。このような場で『あの奥さんは料理がうまい』などの評判がついた」という。

では、いつ、そしてなぜ店で弁当を取るようになったのか、その経緯について、KS氏は婦人達の話を以下のようにまとめた。

花見には行政の関係者や学校の先生などのような来賓が来る。かつて、来賓の方にはみんなで持ち寄った手料理でごちそうを振る舞った。しかし、来賓の方々は1日に数か所の花見会場をまわらなければならず、何度も食事をとるわけにはいかない。そうすると、せっかく出された手料理に手をつけずに次の会場へ移動する場合も多かった。そこでどこの地区からいつ始まったかはわからないが、手土産風に持って帰ってもらえる弁当が登場した。しばらくは来賓の方だけが店の弁当だったが、それを便利だと考えた女性が少しずつ増えだし、やがて、店で取る

ほうが大半になった。もちろん味は自前の料理に限るが、弁当作りには時間も経費もかかる。また、料理を分け合うという風習は若い世代の感覚にはなかった。世の中がどんどん便利になっていく中、「料理を作ることは、ましてや弁当を作ること、それも人に披露する弁当なんて、考えただけで花見に参加する気が薄れてしまう」という多くの女性の意見を取り入れて、平出水中央では、15年ほど前からまとめて弁当を取るようになった。

４－２．平出水中央における花見の内面化

上述したように、平出水中央の花見における大きな変化は花見場所の「室内化」と花見弁当の「外注化」の2点であるが、この2つの変化には共通要因が存在している。それは、花見という行事を維持するための住民の負担を減らすことである。そして、この要因はまさに平出水中央における花見の内面化の中で生み出されたものだと考える。

花見が在地行事と代わった段階では、集落内の協同農作業を成立させるという背景のもとに、花見が1つの独立した行事として行われていた。その前の受容の段階での「娯楽としての共食」の記号としての花見を補完するために、外にある一般的な花見にならい、花（桜やレンゲ草）の要素が導入された。ところが、現在の平出水中央における花見の「室内化」は、こうした集落の花見における花の要素を大幅に除去する行為として見うけられる。これはなぜだろうか。答えを、平出水中央における花見の内面化が置かれている社会的コンテキストの変化の中から探ってみたい。

既に述べたように、高度経済成長期前まで、平出水中央集落の住民のほとんどが専業農家であり、1年中の農作業の中で概ね6つの場面で協同作業をしなければならなかった。しかし、高度経済成長期以降、日本全国の農村社会がガラリと変わった。田中宣一によれば、「田植えから稲刈りにいたるまで、作業が機械化されていったのが大きな変化である。それによって労働力に余剰が生じたために、農業には家族労働力を結集する必要が少なくなり、耕地の広い平地農村においても都市部へ働きに出る家族員が多くなった。同時に、ユイをはじめとする家々の互助協同という慣行が消えていったのである」[田中 2011: 345]。これはまさに平出水中央の現実である。KS氏によれば、従来6つもあった協同農作業が現在では溝

浚えだけ、田んぼを持っている人たちにより維持されている。

では、なぜ集落内の協同農作業がほとんど消滅したにもかかわらず、平出水中央の花見は内面化という形で継続できただろうか。花見を継続させる理由についてインフォーマント達に確認したところ、もっとも多く耳にしたのが、「花見は昔楽しみにしていた。今ももちろん楽しみだが、それ以上にコミュニケーションの場として重視している」という声だった。ここでの「コミュニケーション」は、コミュニケーションという行為としても解釈できるが、それ以上に、「コミュニケーション」の前に省略されている「集合的」という言葉のほうがより重要視されているのではないだろうか。高度経済成長期以降、農村社会は従来の生業・生活共同体という性格から、まず生業における協同が抜かれ、さらに生活における共同も単に住む空間の集合というふうに軽薄化しつつあると考えられる。この中で、集落住民の日常における時間と空間の共有＝コミュニケーションが著しく減少した。そこで、集落の完全なる都市化を避けるために集落住民が選んだ道は、非日常におけるコミュニケーションの確保であると捉えられる。平出水中央の現在の花見はまさに、こうした非日常におけるコミュニケーションを確保するための結衆装置であるといえる。

つまり、高度経済成長期以前の平出水中央における結衆の核が協同農作業だとすれば、花見は結衆を容易にするための娯楽的装置であると解釈できる。しかし、高度経済成長期以降は、むしろ娯楽性を持つ花見そのものが集落における結衆の装置として起用されるようになってきた。この構図こそ、平出水中央における花見の内面化の内実である。そして、結衆の装置としての花見の維持を最優先する集落住民が、花見の開催における負担的な要素を変更し、除去する実践として表れてきたのが、花見の「室内化」および花見弁当の「外注化」であるといえよう。

４－３．向江における花見の内面化

上述した高度経済成長期以降の集落を取り巻く社会的コンテキストは、向江集落にも当てはまる。では、その中で、向江の花見はいかにして内面化されたのだろうか。

戦前における向江上の「ンマネセバ」での花見と、向江下の「公園」での花見はともに戦時中に途絶えたが、戦後しばらくすると、向江ではまた花見が行われ

るようになった。最初は、集落単位ではなく、班などの小さな単位で、集落住民の家の中で花見が行われた。これも桜のない花見であり、在地行事が消滅した後に残された宴会部分としての花見の継続として捉えられる。

そして、1980年代に、ついに集落を単位とする新たな花見の行事が発足した。それは花見運動会である。時期は4月下旬から5月はじめまでとまちまちであるが、桜の花見というより、中央下と同じように、レンゲ草が咲いている時季なので、「レンゲの花見」とも言われた。場所に関しては、最初は田んぼの中やライスセンターの庭などで行われていたが、公民館ができてから、公民館の広場で行われるようになった。

HY氏（76）によると、花見運動会の当日は鯉のぼりが揚げられ、朝10時から始まった。市長や校長などの来賓が招待されたこともある。運動会のプログラムには「風船割り」や「水入れ」、「綱引き」などがあり、4つの班に分かれて競争した。集落の人間なら誰でも簡単に参加できるということを一番の目的としていたので、プログラムはスポーツというよりゲーム的なものがほとんどであった。

運動会は午前中で終わり、昼から公民館の中で宴会となり、それを花見と呼んだのである。花見は午後2時すぎに終わり、後片付けをしたあと、夜は反省会と称してさらに飲み会が続いた。

この花見運動会を考案し、運営していたのは、当時、向江集落に存在していた「トガメ会」という自主的な壮年団である。「トガメ会」は1980年、HY氏を代表とする50歳以下の壮年たちによって作られた団体である。「トガメ」という名称は、向江集落が「鳥神岡」の麓に位置することに由来する。発会当時は12名のメンバーがおり、その後も20年ほどその数はほとんど変わらなかった。発会の経緯についてHY氏に聞いたところ、草はらいや道路の整備、神社の掃除などのような集落の労働奉仕をやるのは、個人では恥ずかしくてなかなかできないので、「若者」たちが組んで担えばいいのではないかと考えたのが発会当初の目的であったという。

「トガメ会」ができてからは、盛んに活動した。集落の労働奉仕はもちろん、花見運動会と六月灯という向江集落の2大行事を仕切るようにもなった。花見運動会を考案したのも「トガメ会」のメンバーたちであったが、その実施に当たっても、田んぼで行われていた時は運動できるように田んぼを整備したり、また、ライスセンターの庭で行われた時には移動トイレを設置したり、そして公民館で行われるようになってからは、花見運動会の1つの特徴である鯉のぼりを集めてきて

当日に揚げたりすることなども、全部「トガメ会」が担当していた。

ところが、「トガメ会」ができてから20数年も経つと、メンバーたちは「高齢者」となり、後継者もほとんどいないため、「トガメ会」は自然消滅してしまった。盛んに行われてきた花見運動会も、2008 年に中止となった。その年の花見運動会の日に、ちょうど集落内で葬式があって、その家から「お構いなく」と花見運動会の続行を願う申し出があったが、やはりそういうわけにはいかないということで、中止された。これが直接の理由ではあったが、その背後には別の理由もあった。それは毎年選手が同じであり、また、人口減少のために、最初は4つの班で競い合ったものが、だんだん2つの組合の競い合いとなり、さらにそれも難しくなった現状があり、中止せざるをえなくなった。それ以後、現在まで花見運動会が行われていない。

４－４．二集落における花見の内面化の差異――花見の「行事化」と「イベント化」

上述したように、平出水中央と向江における花見の内面化はともに共通した内実のもとで行われてきたと考える。つまり、高度経済成長期以降の農村社会の変動に伴う集落の存在の危機に直面する中、従来娯楽の装置として行われてきた花見を、集落の結衆の装置として起用したということである。しかし、共通した内実のもとで行われたものではあったが、その実践面および結末において、二集落の間に相違が生じたのである。ここでは、筆者はこの相違が単なる実践の表象の違いだとは思わず、相違の要因が花見における「提供側」と「享受側」の関係性にあると考える。

これは今まで特に注目されてこなかった点であるが、花見には「提供側」と「享受側」が存在する。忠元公園のような桜名所での花見を例にすれば、桜を植樹し、維持管理する人々、公園を造成し、維持管理する人々、そして、花見のシーズンに桜まつりなどを主催する人々は花見の「提供側」であり、花見客が「享受側」である。もちろん、「提供側」と「享受側」との間に明確な境界線は存在せず、同じ人が両方に同時に属することもありえる。では、平出水中央と向江における花見ではどうだろうか。

花見を単独の1年のみ抽出してみるのではなく、毎年続けて行われている慣習として捉える場合、そしていささか単純な考え方をとると、平出水中央では、花

見の「提供側」と「享受側」が完全に一致するものとして想像できる。なぜなら、毎年役員は替わるとしても、集落住民であるかぎり、必ず自分にも役が回ってくる。その表象として、役員の負担を減らすという集落の「総意」のもとでの、花見の「室内化」が生じたものである。一方、向江では、他の集落住民による多少の協力を除けば、花見運動会を考案し、運営していたのは「トガメ会」である。もちろん、「トガメ会」のメンバー達は向江の集落住民であるが、それ以外の集落住民から見ると、花見運動会が「トガメ会」により提供され、自分たちが享受しにいくことになる。つまり、ここに「提供側」と「享受側」の分離をみることができる。その表象として、「トガメ会」が自然消滅するにつれ、花見も行われなくなった。

筆者は、平出水中央の花見のような「提供側」と「享受側」との一致を花見の「行事化」と呼び、向江の花見のような「提供側」と「享受側」の分離を花見の「イベント化」と呼ぶ。

なぜここで「行事」と「イベント」を相対的な概念として使うのかについて説明したい。まず、「行事」は英語のeventの訳語として使われているため、「行事」と「イベント」の意味に大きな違いはないと考えられる。一方、今までの筆者のインタビューの経験では、ニュアンス的に「伝統的」な行事、「一時的」なイベントというふうな使用の区別が存在する。ここで、両方の意味、特に語源を調べると、新たな違いが見いだせた。『広辞苑』における「行事」の解釈では、「〔行事・行司〕①恒例として事を執り行うこと。また、その事柄。儀式や催し物。②責任者として事を担当すること。③事を担当し世話をする役職。平安時代に始まり、朝廷の公事儀式に「行事の蔵人」などがあり、また社寺にもおかれ、江戸時代には町内や株仲間の役員として月行事などがあった。④（多くは「行司」と書く）相撲の土俵上で両者を立ち合わせ、勝負を判定し、勝ち名乗りを授ける人」［新村 1955: 729］と書いてある。そこでは、「担当」という意味合いが強く滲み出ている。一方、英語のeventについて、『語根中心　英単語辞典』では、eventを構成するeはexと同じout of 、つまり「外に」という意味を持ち、ventはcomeと同じ、来るという意味を持つ。つまり、eventには外からやってくる出来事という意味合いがある［瀬谷 2001: 266-267］。このような語源的解釈に基づいて、筆者は担当者が「外」なのか、「内」なのかにまつわる「行事」と「イベント」の違いを、平

出水中央と向江における花見の内面化の相違を表すのに使うことにした。

花見の「行事化」は、ある集団における花見の安定的継続を可能にする。一方、花見の「イベント化」は向江の事例において花見の中止という結果を招いたが、必ずしもそういう結果になるとは言えない。「提供側」と「享受側」の分離がもたらしたものは両方における可変性であると考える。例えば、もし向江の花見運動会に憧れを感じる別の集落住民がいて、それに参入しようとする場合、向江集落と合併し向江住民になる必要はなく、「トガメ会」に申し出をすればいいわけである。その相談が成立すれば、平出水の各集落の青壮年団が合同で主催する花見運動会として拡大する可能性がある。その場合、「享受側」も平出水全体の住民に広がることになる。これはあくまでも想像上の話であるが、こうした小集団における花見の「イベント化」にも、大群衆の花見に発展する可能性が秘められていると考える。この仮説を検証するための事例研究を今後の課題にしたい。

本節でわかるように、花見の内面化という段階では、二集落ともに集落の結衆の装置として花見を位置づけし、それぞれの集落の事情に沿って実践を行ってきた。平出水中央における花見の内面化の実践が花見の「行事化」として捉えられるのに対し、向江における花見の内面化の実践は花見の「イベント化」として解釈できる。この中で、集落という地域社会において、「行事化」＝花見が持つ安定性と、「イベント化」＝拡張性の創出が同時に観察できるようになった。

おわりに

本稿では、鹿児島県伊佐市にある平出水中央集落と向江集落という近隣する二集落における花見の展開プロセスについて、①受容、②在地行事との逆転、③内面化という3つの段階に分けて記述した。図5はそれをまとめて示したものである。

二集落における花見の受容の段階では、花見が行事そのものとして受容されたのではなく、呼称として、あるいは一種の記号として、集落の春先の在地行事の宴会部分に当てられた形で受容されてきた。この受容の過程を媒介に、日本全体における花見の「娯楽としての飲食」という一般性が集落において消費され、再生産されるようになった。

二集落における花見と在地行事との逆転の段階では、農業技術の変革に伴い、

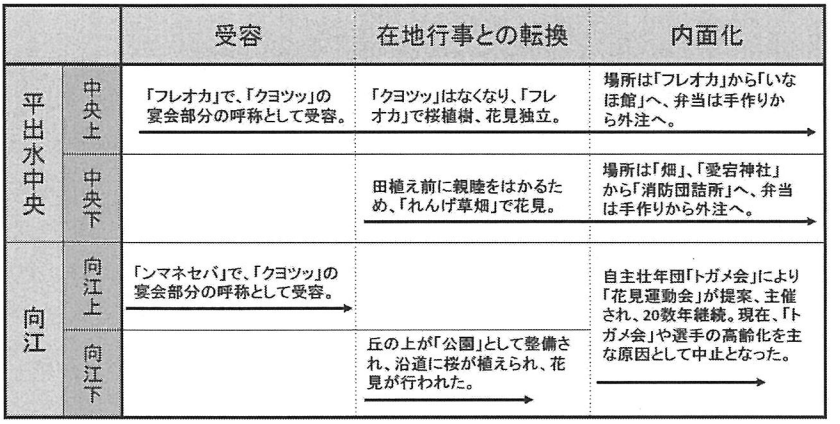

図５：各集落における花見の展開プロセス概略図

在地行事が衰退・消滅したが、まだ協同農作業が行われている集落では、そのための結衆が必要とされる。その際、娯楽的装置として在地行事に代わって、花見が独立した行事として歩みはじめた。その表象として中央上と向江下では桜の要素が導入され、中央下では桜の代わりにレンゲ草を花の要素として起用した。この段階は、二集落の花見が日本全体における一般的な花見ともっとも接近していた時期である。

二集落における花見の内面化の段階では、高度経済成長期から始まった農村社会の変動の中で、集落の存続的危機に直面している集落住民たちは、非日常におけるコミュニケーションを確保するために、花見そのものを結衆の装置として位置づけし、花見の内面化を進めてきた。花見の内面化の実践をめぐって、平出水中央と向江では差異が生じた。平出水中央では、花見の「享受側」であり「提供側」でもある住民たちは、花見を維持するための負担を減らすために、花見の「室内化」と花見弁当の「外注化」を実践した。一方、向江では、1980年代の集落の青壮年自主組織である「トガメ会」が花見運動会を考案し、2008年に中止するまで運営し続けた。平出水中央と向江における花見の内面化の差異の内実が、一方では「享受側」と「提供側」が一致する花見の「行事化」が進められ、他方では、花見の「享受側」と「提供側」が分離する花見の「イベント化」が進められたとして抽出できる。この中から、集落という地域社会において、花見が持つ安定性と拡張性の創出が同時に観察できた。

以上は二集落における花見の展開のあり方に関するまとめであるが、花見がどうやって「日本文化」になれたのかという疑問に対し、本稿を通して、地域社会の側面から以下のことが指摘できる。

①地域社会において、花見が受容されてから現在に至るまで、日本全体における花見の持つ一般性が常に消費され、再生産されている。

②日本全体における花見の持つ一般性は必ずしも「桜」により規定されたものではなく、地域社会が主体として、花見に内包されている多様な要素を選択的に取り入れ、操作し、場合によっては除去する。

③花見の持つ一般性が地域社会のコンテキストの中で、地域社会を主体として消費され、再生産されることを通して、地域社会の意味が書き込まれることになる。地域社会が多様であることから、多様な意味が一般性に書き込まれるようになってくると考えられる。ただし、その結果で生み出されたのは個々の個別性としての存在ではなく、むしろ一般性に多様な意味を内包させることを可能にする属性を付与することになる。

④地域社会における花見の展開の中から、花見の「行事化」と花見の「イベント化」という構図が浮き彫りになった。これはまさに日本全体における多くの花見が、その維持や広がりを求めて繰り広げる様相の縮図だと考える。

以上のように、本稿では、地域社会における花見の展開に着目することを通して、その展開のあり方を鹿児島県伊佐市にある近隣する二集落において確認し、また、それが現代日本社会における花見の「日本文化化」現象にどのように関連しているのかについて議論した。

どうやって花見が「日本文化」になれたのかという疑問に対し、実証的な研究を通して発言する花見研究はほとんど皆無といえる中、本稿は新たな花見研究を実践したことに意味を持つ。しかし、残されている課題も大いに存在する。特に、本稿では地域社会という花見の主体に着目したが、都市、団体、個人などのように、花見の主体、そしてその主体がおかれている文脈はまだ多数存在し、多彩な様相を呈しているであろう。今後、これらに関する研究にも取り組み、地域社会に関する研究と合わせて、現代日本社会における花見に対する新たな研究体系を作りたい。

【注】

1) 以降、「桜の花見」を「花見」と略す。

2) 事例の中では、桜が「不在」の花見もあるが、これは桜の花見の普及に触発されたものであると考え、取り上げることにした。このような事例の発見は、まさに筆者の花見研究のスタンスに由来するものである。

3) この点について具体的に検証すべきだろうが、ここでは筆者の今までの経験に基づいての判断とする。

4) 例えば、[佐藤 1937]、[三好 1938]、[山田 1941]、[有岡 2007]など。

5) この点に関して鹿児島全体における桜の花見の受容時期について検証すべきであるが、別稿に譲りたい。本稿では、伊佐地方における花見の受容について簡単に述べることにする。

6) 東哲郎 2013「平出水地区サークル一歩卓話資料」より。

7) 以下、中央上、中央中、中央下と略称する。

8) 「平成 27 年度版　統計いさ」より。

9) 「昭和 56 年度版　統計おおくち」より。

10) 「平成 27 年度版　統計いさ」より。

11) 宝泉氏は定年後地元に戻ってから郷土史研究に取り組み始めたので、おそらく 20 年以上前の話である。

12) 平出水中央は昔、ニエノキと呼ばれた。

13) 平出水下は昔、下（シモ）ンチョと呼ばれた。

14) 「ンマネセバ」は馬を寝かせる場所の方言だと考えられる。

15) もちろん、各要素はさらに細分化することが可能である。

16) 詳細な時期は定かではないが、遅くとも戦前から「クヨツッ」がすでに行われなくなっていた。

17) 「花見と在地行事との逆転」という現象は、平出水中央や向江のような、在地行事が完全になくなり、花見が独立した行事として成り立つパターン以外に、在地行事が縮小し、逆に花見の中に組み込まれるというパターンも存在する。

18) 向江下にある有満酒店を指す。有満酒店は現在の大口酒造株式会社を構成する 11 事業所のうちの 1 つである。

19) 二集落におけるこの段階がいつからいつまでなのかはっきりとしないが、概ね高度経済成長期以前を指している。

[20] 伊佐地方におけるサノボリ・サナブリの訛りで、田植上りの家庭での祝いを指す。
[21] 鹿児島における飲み会の方言。
[22] 中央上では庭に八重桜を植えた住民がいる。伊佐地方では、4月第1日曜日となると、「ソメイヨシノ」はほとんど散ってしまい、八重桜がまだ満開の状態である。

参考文献

E.B.タイラー 1962 『原始文化』 比屋根安定訳 誠信書房

有岡利幸

2007a 『桜I』 「ものと人間の文化史137-1」 法政大学出版局

2007b 『桜II』 「ものと人間の文化史137-2」 法政大学出版局

大口市郷土誌編さん委員会編

1978 『大口市郷土誌 上巻』 鹿児島県大口市

1979 『ふるさと散歩（資料第7集）』 鹿児島県大口市

折口博士記念会編 1955 『折口信夫全集 第2巻』 中央公論社

勝木俊雄 2015 『桜』 岩波書店

五代秀尭・橋口兼柄編 1966 『三国名勝図会 中巻』 南日本出版文化協会

小松和彦 2002 『神なき時代の民俗学』 せりか書房

今野圓輔 1976 『季節のまつり』 河出書房新社

斉藤正二 2002 『日本人と桜／花の思想史』 八坂書房

佐藤太平 1937 『櫻と日本民族』 大東出版社

桜井満 1961 「枕詞と呪農―『花散らふ』と『み雪ふる』の発想」 『萬葉』 40:32-40

佐野藤右衛門 1998 『桜のいのち庭のこころ』 草思社

下野敏見 2011 『南九州の民俗文化誌』 南方新社

主婦の友社編 2010 『日本桜の名所100選 見直したい日本の「美」』 主婦の友社

白幡洋三郎 2000 『花見と桜―〈日本的なるもの〉再考―』 PHP研究所

新村出編 1955 『広辞苑』 岩波書店

瀬谷廣一 2001 『語根中心 英単語辞典』 大修館書店

田中宣一 2011 「地域の互助協同と高度経済成長」 『国立歴史民俗博物館研究報告』 171:339-357

宝泉市二 2009 「ひらいずみ」 個人出版

三好學 1938 『櫻』 冨山房

山田孝雄 1941 『櫻史』 櫻書房
熊華磊 2013 「花見と地域社会―鹿児島県伊佐市忠元公園の事例より―」 『地域政策科学研究』 10: 195-211
和歌森太郎 1981 『和歌森太郎著作集　第8巻』 弘文堂

参考資料

伊佐市
2014 「平成25年度版　統計いさ」
2016 「平成27年度版　統計いさ」
大口市
1982 「昭和56年度版　統計おおくち」
1987 「昭和61年度版　統計おおくち」
1992 「平成3年度版　統計おおくち」
1998 「平成9年度版　統計おおくち」
2003 「平成14年度版　統計おおくち」
2009 「平成20年度版　統計おおくち」
東哲郎 2013 「平出水地区サークル―歩卓話資料」

How Cherry-blossom Viewing Has Developed in Communities

Focusing on the Case of Two Neighboring Communities, *Hiraizumi-chuuou* and *Mukae*, in Isa, Kagoshima Prefecture

Xiong Hualei

In contemporary Japanese society, cherry-blossom viewing has become part of the Japanese culture. Previous studies always make the argument about whether the relationship between the Japanese and cherry-blossom viewing is intrinsic or not. Of course it is not intrinsic, but the important thing is that cherry-blossom viewing as part of Japanese culture was historically constructed by people living in many different communities. Thus, my study will focus on how cherry-blossom viewing has developed in communities. This paper will compare the development in two neighboring communities, Hiraizumi-chuuou and Mukae, in Isa, Kagoshima Prefecture, from three stages: acceptance, reversal of traditional events and internalization. From this comparison, I will reveal how cherry-blossom viewing has developed in communities. At the same time, I will try to explain how cherry-blossom viewing has become the Japanese culture.